

Fare 使役構文における Cliticization と格付与に対する 素性 [±Human] の関与について

Acerca de la cliticización en la construcción causativa por el verbo
matriz Fare y la intervención del rasgo [±humano]
en la asignación de Caso¹⁾

石岡 精三
Seizo ISHIOKA

0. はじめに

本稿では、以下の (1) から (5) の用例が提起する問題が考察される。(1a-b) の用例は, embd. V の Argument としての主語 NP (Carlo) と目的語 NP (il presidente) が共起する。目的語 NP が [+Human] である場合、主語 NP に与格 (Dat) が付与される派生は非文と判断される (1a)。¹⁾ 一方、主語要素が付加語 (Adjunct) で実現される (1b) は文法的と判断される。embd. V 目的語 NP が [-Human] である (1c-d) では、(1a, b) の相違が観察されない。²⁾

- (1) a. *fecero uccidere il presidente a Carlo (Strong 1983:p.142)
 b. fecero uccidere il presidente da Carlo (ibid.)
 'they had Carlo kill the president'
 c. fecero scrivere una lettera a Carlo (ibid.)
 d. fecero scrivere una lettera da Carlo (ibid.)
 'they had Carlo write a letter'
- (2) a. *Maria_i gli si_i fece aiutare (Strong 83:p.145)
 'Maria_i had him(gli) help her_i(si)'
 b. *gliela feci aiutare (ibid.)
 'I had him(gli) help her(la)'
 c. gliela feci scrivere (ibid.:p.147, 30)
 'I had him (gli) write it(la)'
- (3) a. Maria_i gli si_i fece presentare (Strong 1983:p.145)
 'Maria_i had someone introduce her_i(si) to him(gli)'
 b. gliela feci presentare (ibid.)
 'I had someone introduce her(la) to him(gli)'
- (4) a. far conoscere qualcuno a qualcuno (Strong 1983:p.137,12)
 b. *far conoscere qualcuno da qualcuno (ibid.)
 'to make someone know someone'
 c. gliela feci conoscere (ibid.)
 'I made him(gli) know her(la)'
- (5) a. gliela faccio uccidere (Bordelois 1978:p.37,72)
 'I make him(gli) kill her(la)'
 b. gliela feci conoscere (Strong 1983:p.137,12)
 'I made him(gli) know her(la)'

(1) において観察された相違は、主語要素が clitic で実現される (2) と (3) でも見られる。

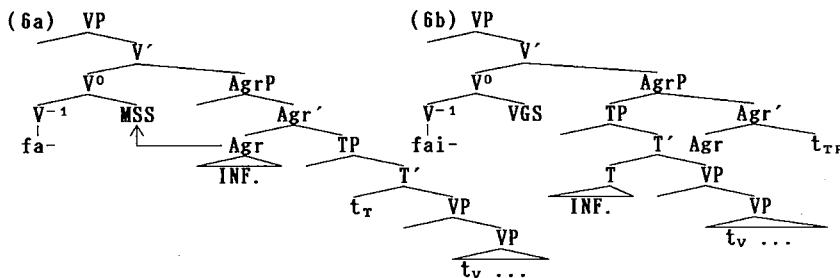
(2) における embd. V の主語要素は Dat clitic (gli) で実現される。目的語要素が [+Human] の

素性もつ (2a-b) は非文である。[-Human] である目的話要素が生起する (2c) は文法的と判断される。一方, (3) においては, Argument としての主話要素が生起しない。上の (1) から (3) は, Argument として主話要素が生起する場合, ある一定の条件下で当該主話要素に対する格付与が排除されると考えられる (格付与に関する規制)。

(4) と (5) は, *conoscere* タイプの動詞が生起する用例では, (1) から (3) で観察される格付与に関する規制が発動しないと思われる。更に, (5a) は主話要素が clitic で生起する場合, 主話要素に対する格付与の規制が発動しない方言の存在を示すと考えられる。³⁾ 本稿では, 上で述べた主話要素に対する格付与の規制が提案される。第1節では, Fare 使役構文の構造が提示される (比較の観点から, 対応するフランス語の Faire 使役構文の構造も検討する)。更に, 当該使役構文における格付与と Cliticization を説明する定義体系が示される。第2節では, この定義体系が惹起する問題点と受動使役構文での格付与が検討される。第3節では, 本稿の (1) から (5) の用例を説明すると思われる論法が提案される。第4節は結語を構成し, 対応するフランス語構文との比較が試みられる。

1. Fare/Faire 使役構文の構造と定義体系

イタリア語とフランス語の使役構文に対して, それぞれ (6a-b) が想定される (石岡 (1994a))。使役動詞は AgrP を下位範疇化する。embd.V の主語は, VP に付加した位置に基底生成される。不定法節において, V の T 位置への移動により不定法形態が形成される。Belletti (1990) が主張するように, イタリア語の不定法節内の V は, T を経由して Agr 位置まで移動する。



フランス語では, V の移動は T 位置で停止すると考えられる。この相違は, pro Drop 言語であるイタリア語と異なり, フランス語の不定法節における Agr が語彙的要素の移動を受けた場合でも, その sister 要素 (TP) を L 標示不可能と考えることにより説明される。結果として, フランス語の不定法節における TP は barrier を構成する。この TP の barrier 性は, TP 全体が SPEC (Agr) へ空移動することにより相殺される。この場合, (7) の L 標示定義を採用する必要がある。

(7) the definition of L-Marking:

Where α is a lexical category, α L-marks β iff β agrees with the head of γ that is θ -governed by α . (Chomsky 1986:p.24)

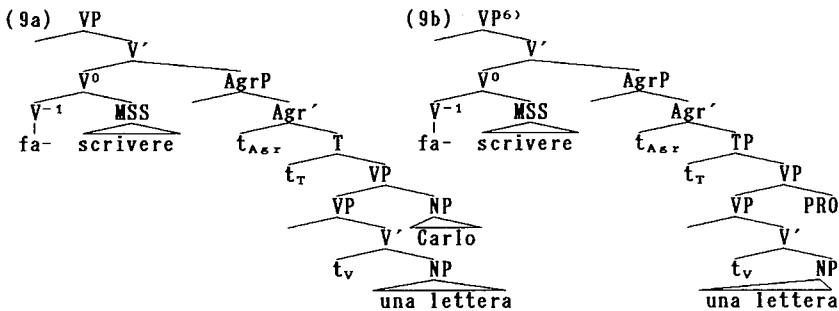
この空移動により, matrix V による不定法形態が生起する embd.T の統率が可能となる。この統率

関係によって形成される複合動詞 (Complex Verb (CV)) が形成される。4) イタリア語の構造 (6a) では、不定法形態が移動した *embd. Agr* が *matrix V* の Morphologically Selected Slot (MSS) 位置へ移動することにより、CV が形成される。5)

イタリア語とフランス語の使役構文において形成される複合動詞 (CV) は、格付与に関して、(8) の特性をもつと考えられる。

(8) CV's Properties of Case Assignment ((a)-(d) are adapted from Goodall 1987) :

- a. CV has the primary Case Array (___ Acc(Dat)) .
- b. Case-assignment is optional.
- c. When a verb assign Case, its entire Case Array must be assigned.
- d. Acc is assigned only under Adjacency.
- e. CV loses its property of assigning Case when the Case in question has already been assigned by the *embd.V(t_v)*.
- f. Dat cannot be assigned to an element base-generated as V's sister.



例えば、(1c) に対応する構造 (9a) において、CV が目的語 NP (una lettera) と基底生成された位置にある主語 NP (Carlo) のそれぞれに、Accusative (Acc) と Dative (Dat) を付与する (8a)。

(1d) に対応する構造 (9b) では、*embd.V* の主語が付加語 PP (da Carlo) の形で実現される。つまり、CV が *embd.V* の主語に格を付与する必要がない。複合動詞 (CV) (あるいは *embd.V*) が目的語 NP (una lettera) に Acc を付与する。*embd.V* が自動詞である用例 (10a) においても、CV の Case Array (8a) は、基底生成された位置にある主語 NP (Maria) に Acc を付与する。

- (10) a. Paolo fece piangere Maria (Radford 1979:1a)
'Paolo made Mary cry'
- b. Paolo la fece piangere (ibid.:2a)
- c. *Paolo fece piangerla (ibid.:2b)
'Paolo made her(1a) cry'
- d. Paolo gliela fece chiudere (ibid.:3a)
- e. *Paolo fece chiudergliela (ibid.:3b)
'Paolo made her(gli) close it(1a)'
- f. Mario vide il ragazzo rubarla (Burzio 1978:45a)
- g. *Mario la vide il ragazzo rubar (ibid.:45b)
'Mario saw the child steal it(1a)'
- (11) a. *gli farò scrivere una lettera a Maria (Skytte & Salvi 91:p.506)
- b. *farò scrivergli una lettera a ~ Maria (ibid.)
'I will make Maria write a letter to him(gli)'
- c. gli farò scrivere una lettera (da Piero) (gli) (ibid.)

- d. *farò scrivergli una lettera (da Piero)
 'I will have a letter written to him(gli) (by Piero)'
- (12) a. Giovanni ha fatto accusare/??aiutare Maria a Piero (Burzio 1986:p. 309, fn. 8)
 'Giovanni made Piero accuse/help Maria'
 b. ?*Giovanni mi/ti ha fatto accusare/aiutare a Maria (ibid.)
 'Giovanni made Maria accuse/help me/you'
 c. Giovanni mi/ti ha fatto accusare (da Maria) (ibid.:p. 311, fn. 19)
 d. *Giovanni ha fatto accusarmi/ti (da Maria) (ibid.)
 'Giovanni had me/you accused (by Maria)'
- (13) a. *Pierre a fait te raser à Paul (Rouveret and Vergnaud 1980:fn. 38)
 b. ?Pierre a fait te raser Paul (ibid.)
 c. *Pierre t' a fait raser à Paul (ibid.)
 d. *Pierre t' a fait raser Paul (ibid.)
 'Pierre made Paul shave you'
 e. Pierre t' a fait te raser (ibid.)
 'Pierre made you shave yourself'

主語,あるいは目的語が clitic で生起する用例はどのように説明されであろうか。主語 clitic と目的語 clitic は NP の場合と同じ位置に基底生成され,ある一定の局所領域内にある最上位の機能範疇の主要部位置へ付加移動すると考える。Kayne (1989)と同様に,移動によって空となった主要部への付加移動は許容されないと想定する。この局所領域は,定義(14)から(21)によって決定される統率範疇 (X^0 -GC)として指定される。

- (14) Binding Principle A (X^0 Binding) :
 The trace of a clitic is bound by its antecedent in its governing category (X^0 -GC) .
- (15) The definition of X^0 Binding and XP Binding:
 YP is bound by X^0 iff YP and X^0 are coindexed and X^0 c-commands YP (c-command being defined with respect to a branching node X' or XP).
- (16) The definition of Governing Category (X^0 -GC and XP-GC) :
 β is a governing category for α iff β is the minimal functional XP containing α , a canonical governor of α , and a SUBJECT accessible to α (cf. Aoun 1985) .
- (17) The definition of SUBJECT (X^0 Binding) :
 The SUBJECT consists of an independent active Agr in situ or of an argument subject assigned Acc Case (including its trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.
- (18) Clitic Placement Constraint (CPC) :
 A clitic must adjoin to the highest functional X^0 element in its X^0 -GC, (general principles of UG allowing) . (adapted from Ouhalla 1989:24).
- (19) The definition of SUBJECT (XP Binding) :
 The SUBJECT consists of an independent active Agr in situ or of an argument subject assigned Case (including its trace) which is in its base position or has moved from its base position to a SPEC position to fulfill Case Filter.
- (20) a. The definition of XP Binding A:
 An anaphor is bound by an argument XP but PRO in its GC(XP-GC).
 b. The definition of XP Binding B:
 A pronominal is not bound by an argument XP in its XP-GC.
- (21) X^0 Binding for NCM (non Case-Marked) clitics and NSD (Non Subject Dative) clitics :
 The trace of an NCM and an NSD clitic is bound by its antecedent in its XP-GC.

X^0 Binding は clitic の移動上限を画定し, XP Binding は clitic の基底生成を規制する (20) .

また、後者の XP Binding は、mi, ti, si のような弁別的な格標示形態をもたない NCM clitic と、D 構造において *embd.V* から *Dat* を付与・実現される NSD clitic の X^0 -GC を決定する。つまり、NCM clitic と NSD clitic は、その XP-GC 内部にある最高位の機能範疇の主要部位置へ付加移動する (21)。 X^0 -GC と XP-GC は clitic と当該 clitic を規範統率する要素、更に当該 clitic にとって接近可能な大主語 (SUBJECT) を含む最小の機能範疇の最大投射と規定される (16)。 X^0 -GC と XP-GC の決定に重要な役割を果たすのは大主語である。 X^0 -GC と XP-GC に共通して大主語として機能するのは Independent Active Agr in situ である。これは、基底生成された位置にあり、TP を下位範疇化する Agr です。V を内包する T の複合体の移動を受けた場合、その sister 要素である TP を L 標示可能な Agr であり、VP の Inner Argument に関する格付与、 θ -Role 付与等において、上位の X^0 (V^0) 範疇に依存しない Agr を指す。例えば、[+Finite] AgrP 中の Agr と複合動詞 (CV) を形成しない場合の知覚構文中の *embd.Agr* がこれに相当する。Fare 使役構文において、CV を形成する *embd.Agr* はそうでない定義 (16) と (18) で規定されるように、格を付与された主語要素 (とその痕跡) も大主語として機能する。 X^0 Binding では、構造格である Acc を付与される主語要素 (とその痕跡) も大主語となる (17)。XP Binding では、Acc, あるいは *Dat* を付与された主語要素 (とその痕跡) もまた大主語を構成する (19) 7)。

(10b-c) において、CV は基底生成された位置にある *embd.V* の主語 clitic (la) に Acc を付与する。この clitic に対して大主語となるのは *matrix Agr* である (つまり、*matrix AgrP* が当該 clitic の X^0 -GC となる)。結果として、clitic (la) は、義務的に *matrix Agr* 位置へ付加移動する。(10d-e) において、CV の Case Array (8a) は基底生成された位置にある CM clitic (la) と主語 clitic (gli) のそれぞれに Acc と *Dat* を付与する。つまり、*matrix AgrP* が両 clitic に対する X^0 -GC を構成する。これにより、(10d) と (10e) の相違が説明される。8)

(11) は、NSD clitic (gli) が生起する用例である。既に述べたように、NSD clitic の痕跡は、その XP-GC 内部で束縛される必要がある。(11a) と (11b) において、CV によって *Dat* を付与された主語 (Maria) が大主語として機能する (*embd.Agr* は Independent Active Agr in situ でない。つまり、大主語とならない)。よって、*embd.TP* が NSD clitic (gli) の XP-GC となる。しかし、CV が主語 NP (Maria) に格を付与する段階で、*embd.T* は空である。つまり、この場合の派生は生成不能として非文と予測される。(11c) と (11d) では、*embd.AgrP* 内の主語位置には PRO が生成されます。この PRO は大主語として機能しない。*matrix AgrP* が XP-GC となる。結果として、NSD clitic (gli) は義務的に *matrix Agr* へ付加移動する。(12) は、NCM clitic が生起する用例である。NCM clitic の痕跡は、NSD clitic の場合と同様に、その XP-GC 内部で束縛される必要がある。つまり、(11) を説明する論法によって、(12b-d) が説明可能である。9)

2. 問題点と受動使役構文

本節では、第 1 節において提示された定義体系が惹起する問題点と受動使役構文について考える。最初に、NCM clitic が生起するフランス語用例 (13) を検討する。CV が基底生成された位置にある *embd.V* の目的語 (te) と主語 (Paul, te) のそれぞれに Acc, *Dat* を付与すると想定する。この

場合, Dat を付与された 当該主語要素が NCM clitic (te) の大主語となる (embd. TP が XP-GC) 。結果として, 目的語である NCM clitic (te) は, 不定法形態 (raser) が生起する embd. T 位置へ付加移動することになる。この論法により, (13a) と (13e) のみが文法的と予測される。この予測は事実と反する。この問題は, [+Human] の目的語要素が生起する場合, CV の Case Array (8a) による主語 NP に対する Dat 付与が排除されると前提することにより打開される (この格付与に関する規制の詳細は, 第3節で検討する)。主語 clitic に対しては, この規制が発動しないと考えられる。結果として, (13e) 以外がすべて非文と予測される。この状況も, 問題を惹起する。これは, フランス語の NCM clitic が 基底生成された位置にある embd. V へ付加移動することにより, Case Filter の要請を満たすと前提することにより解決される (要素格付与)。結果として, NCM clitic の付加を受けた embd. V は, embd. T へ移動する (この場合, embd. V は基底生成された位置にある clitic (te) に位置格付与していない。よって, CV の Case Array (8a) は, embd. V の主語 NP (Paul, te) に Acc を付与可能である)。これにより, (13) の用例すべての文法判断が説明される。¹⁰⁾ 同様に, この Dat 付与に対する規制により, embd. V として aiutare が生起する (12a-b) が説明される。(12a-b) は共に非文と予測される。embd. V が accusare である (12a) は文法的と判断される。これは, embd. V が conoscere (accusare) タイプの場合に, 上の格付与に対する規制を回避するプロセスが存在することを物語る (詳細は, 後述する)。このプロセスにより, (12a) の主語 (Piero) に対する Dat 付与が可能となる。¹¹⁾ (12b) の非文性は, X⁰ Binding により説明される (当該 NCM clitic の X⁰-GC となるのは embd. TP である)。この格付与の規制を回避するプロセスは, 受動使役構文の用例である (22) においても必要となる。

- (22) a. Gianni è stato fatto lavorare molto (Guasti 1991:6)
 'Gianni has been made to work a lot'
 b. la macchina è stata fatta riparare a/da Gianni (ibid.:11)
 'the car has been made to be repaired by Gianni'
 c. Giovanni fu fatto riparare la macchina (Burzio 1986:p.232)
 'Giovanni was made to repair the car'

matrix V が能動形で実現される場合の CV は (8a) の Case Array (___Acc (Dat)) をもつ。一方, matrix V が受動形である場合には, 一般の V と同様に, Acc 付与機能を失う (格の吸収)。(8a) の Case Array において, Dat 付与は Acc 付与を前提する (8c)。よって, 受動の場合の CV では, (8a) の Case Array による格付与が適用されない (CV が Case Array をもたないことになる)。(22c) における NP (la macchina) は, embd. V (riparare) から Acc を付与される。一方, (22b) における主語 NP (Gianni) に格を付与する要素は何であろうか。embd. V (riparare) が基底生成された位置にある主語 NP (Gianni) に Dat を付与する可能性はない。この状況は, (22b) を Case Filter 違反として, 非文と予測する。この予測は事実と反する。この問題は, 受動の matrix V と不定法形態から構成される CV が 主語 NP に直接 Dat を付与可能な Secondary (Default) Case Array をもつと考えることにより打開される。

3. 提案

この格付与規制を回避するプロセスとして、以下の(23)を想定する。¹²⁾ conoscere タイプに属す動詞例が(24)で示され、(25)では、いくつかの用例が列挙される。更に、本稿の直接対象である(1) - (5)における embd.V の主語要素に対する Dat 付与規制として(26)を前提する。

(23) Hypotheses :

- a. CV consisting of the matrix V(fa-) and a member of type CONOSCERE group has the primary Case Array(___ Dat) instead of the primary Case Array(___ Acc(Dat)).
- b. Case assignment through CV's primary Case Array has priority over that through the embd.V's Case Array in case of the former being applicable.
- c. CV consisting of the matrix passive V(fa-) and an infinitival form is given the secondary (default) Case Array(___ Dat).
- d. The [+Finite] Agr has to discharge its Nom assigning property.

(24) Members of the Group of Type CONOSCERE :

conoscere(to know), vedere(to see), sentire(to hear), sapere(to know), credere(to believe), capire(to understand), notare(to notice), comprendere(to understand), amare(to love), sposare(to marry), perdere(to lose), guadagnare(to earn), ottenere(to obtain), vincere(to win), accusare(to accuse), etc.

(25) a. ho fatto vedere il film ai/*dai ragazzi (Marcantonio 1979:17a)

'I made the boys see the film'

b. Carla ha fatto notare la gaffe di Pietro a/*da tutti i presenti (ibid.:18a)

'Carla made all the present note Pietro's gaffe'

c. ho fatto amare l'Italia ai/*dai miei amici (ibid.:30)

'I made my friends love Italy'

d. i genitori l'hanno fatto sposare ad un uomo molto ricco (ibid.:28)

'her parents made a very rich man get married to her(1a)'

e. il consolato ha fatto ottenere il passaporto a/*da Franco (ibid.:34)

'the consulate made Franco obtain the passport'

f. la fortuna, pietosa, ha fatto vincere cento milioni a/*da

un povero contadino (ibid.:35)

'fortune took pity and made a poor farmer win one hundred million'

(26) Hypothesis :

CV's primary Case Array(___ Acc(Dat)) cannot assign Dat across nodes [+Human] to the subject NP₂ and to the subject NP₄ (±including clitic [+Human]) in the following configurations (a) and (b) (±including clitic [+Human] to be parameterized according to dialects, marked [-] in α Dialect while marked [+] in Standard Italian) :

$$(a) \text{ CV ... (NP}_1\text{) + } \left\{ \begin{array}{l} \text{PP [+Human]} \\ \text{clitic [+Human]} \end{array} \right\} + \text{NP}_2\text{ [+Human]}$$

$$(b) \text{ CV ... } \left\{ \begin{array}{l} \text{NP}_3\text{ [+Human]} \\ \text{clitic [+Human]} \end{array} \right\} + \text{NP}_4\text{ [+Human]}$$

仮説(26)により、CVのPrimary Case Array(8a)が[+Human]の素性をもつ要素(clitic, NP, PP)を越えて主語NPに格(Dat)を付与することはない。以下の用例(27)から判断すると、

(26a)の図式における embd.V の主語が clitic である場合には、この格付与規制が発動しないと言える。一方、(26b)の図式では、この規制の適用が方言ごとにパラメーター化される考えられる。

標準イタリア語 (SI) では、NP 主語あるいは、clitic 主語に対してこの規制が適用される。α 方言では、主語要素が NP である場合に限り当該規制が適用され、clitic 主語に対しては発動しない。

- (27) a. *Piero fece dare le chiavi a Maria a Carlo (Strong 1983:p.139,16a)
 'Piero had Carlo give the keys to Maria'
 b. *gli farò scrivere una lettera a Maria (Skytte & Salvi 1991:p.506)
 'I will make Maria write a letter to him(gli)'
 c. gli farò scrivere una lettera a Maria (ibid.)
 'I will make him(gli) write a letter to Maria'
 d. ???j' ai fait écrire une lettre à Marie aux enfants (Pijnenburg and Hulk 1989:14b)
 'I made the children write a letter to Marie'
 e. *Odile lui fait écrire une lettre à Marie (ibid.:88)
 'Odile makes Marie write a letter to him(lui)'
 f. Odile lui fait écrire une lettre à Marie (ibid.)
 'Odile makes him(lui) write a letter to Marie'
 g. Odile lui fait écrire une lettre (ibid.:89)
 'Odile makes someone write a letter to him(lui)'
 h. Odile lui fait écrire une lettre (ibid.) 'Odile makes him(lui) write a letter'

(27) を具体的に検討する。(27a)において、matrix V と dare から構成される CV は、(8a) の Case Array をもつ。PP (a Maria) が介在するため、主語 NP (Carlo) に対する Dat 付与が排除される(同じ Case Array (8a) が NP (le chiavi) に Acc を付与する。PP (a Maria) は、D 構造において斜格を付与・実現されると考える)。(27b)でも同様であり、基底生成された位置にある clitic (gli) が介在し、主語 NP (Maria) に対する Dat 付与が許容されない(この派生は、X⁰にも抵触する)。一方、主語が clitic (gli) で生起する(27c)では、当該主語に対する Dat 付与が発動可能である(matrix AgrP が主語 clitic (gli) の X⁰-GC となるため、この派生は同時に、X⁰ Binding を満たす)。同様の論法により、フランス語用例(27d-h)が説明される。¹³⁾また、(27g-h)はイタリア語にも妥当と思われる。つまり、(28a-b)も適切に文法的と予測される。

- (28) a. gli farò scrivere lettera 'I will make someone write a letter to him(gli)'
 b. gli farò scrivere lettera 'I will make him(gli) write a letter'

(27) を説明する論法は、本稿の(1) - (3)をも説明可能である(図式(26b))。¹⁴⁾(2b)と(2c)の相違を検討する。主語 clitic (gli) は embd.V に右方付加した位置に生成され、目的語 clitic (la) は embd.V の sister 位置に生成される(cf. (9a))。clitic (la) が [-Human] である(2c)と異なり、(2b)の目的語 clitic (la) が CV と主語 clitic (gli) との間に介在するため、Case Array (8a) による当該主語 clitic に対する Dat 付与は排除される(SI)。一方、α方言では、主語要素が clitic である場合、(26b)の規制が適用されない。結果として、(2b)の主語 clitic は Dat を付与される((5a)も同様の論法により、文法的と予測される)。¹⁵⁾次に、embd.V として conoscere タイプの動詞が生起する用例を検討する。SI の用例としての(2b)の非文性を説明する論法は、SI としての(5b)を不適切に非文と予測する。この予測は事実と反する。この問題は、matrix V と conoscere タイプから構成される CV が(8a)の代わりに、Primary Case Array (___Dat) をもつと考えることにより打開される(仮説(23a))。¹⁶⁾つまり、

(26) の規制が適用されない。結果として、Case Array (___Dat) が主語 clitic (gli) に Dat を付与し、embd.V が目的語 clitic (la) に Acc を付与する。このように、 α 方言と標準イタリア語 (SI) の双方において、(5b) は文法的と予測される。

本稿で想定された仮説群は、以下の予測を可能にする ((29a-b) は既に検討済み) 。

(29) ¹⁷⁾		α	SI
a. <u>giela</u> feci aiutare 'I had him(<u>gli</u>) help her(<u>la</u>)'		ok	*
b. <u>giela</u> feci conoscere 'I had him(<u>gli</u>) know her(<u>la</u>)'		ok	ok
c. Mario <u>mi</u> fa presentare Maria 'Mario makes me(<u>mi</u>) introduce Maria'		ok	*
d. Mario <u>mi</u> fa conoscere Maria 'Mario makes me(<u>mi</u>) know Maria'		ok	ok
e. Mario <u>mi</u> fa conoscere a Maria 'Mario makes Maria know me(<u>mi</u>)'		*	*
f. Mario <u>la</u> fa presentare a Maria 'Mario makes Maria introduce her(<u>la</u>)'		*	*
h. Mario <u>la</u> fa conoscere a Maria 'Mario makes Maria know her(<u>la</u>)'		ok	ok

本節の最後に、(4b) の非文性を検討する ((30a) として再掲する。 (31) は対応するフランス語用例)。一般的に、イタリア語の Fare に対応する matrix V から構成されるロマンス諸語の使役の使役構文では、embd.V が自動詞の場合、主語要素を P (Da, Par, Por) によって導入することは許容されない (Zubizarreta 1986)。実際には、embd.V が自動詞の場合でも、当該 V によって下位範疇化される要素 (PP) が生起する用例は許容される ((30f, e), (31e))。 ¹⁸⁾

- (30) a. *far conoscere qualcuno da qualcuno (Strong 1983:p.137, 12)
 'to make someone know someone'
 b. fecero uccidere il presidente da Carlo (ibid.:p.142)
 'they had Carlo kill the president'
 c. fecero scrivere una lettera da Carlo (ibid.)
 'they had Carlo write a letter'
 d. *farò lavorare/camminare/studiare da Piero (Burzio 1986:p.252, 53)
 'I will make Piero work/walk/study'
 e. farò scrivere a Maria da Giovanni (ibid.:p.252, 52a)
 'I will make Giovanni write to Maria'
 f. ?questo farà parlare di voi da tutti (ibid.:p.252, 52b)
 'this will make everyone talk of you'
- (31) a. on a fait connaître cela par mon père (Postal 1989:p.69, 131a)
 'one had my father know that'
 b. Marcel vous a fait épouser par le médecin (ibid.:p.3, 8a)
 'Marcel had the doctor marry you'
 c. *je ferai danser par Marie (Kayne 1975:p.247, fn.56)
 'I will make Mary dance'
 d. *je ferai venir chez vous par tout le monde (ibid.)
 'I will make everybody come to your house'
 e. je ferai parler de vous par tout le monde (ibid.)
 'I will make everyone talk of you'

embd.V が他動詞である場合はどうであろうか。Strong (1983) は、conoscere タイプの embd.V から構成される CV では、主語要素が間接目的 (IO) と再解釈されると前提する。よって、当該主語要素は、一般的に IO を導入する P (A) を伴うことになる。しかしながら、この論法は、格付与に関して conoscere と同様の挙動を示すと思われる connaître が生起する用例 (31a) を説明できない。 ¹⁹⁾ 文法的と判断される当該用例の中で (31a) 以外では、CV の Case Array による格付与が発

動している。(30b)では、CVのCase Array(8a)がNP(il presidente)にAccを付与する。embd.V(uccidere)が当該NP(il presidente)にAccを付与する可能性はないと考えられる。仮に、embd.Vによる格付与が適用される場合、(30a)は文法的と予測されることになる。つまり、CVのPrimary Case Arrayによる格付与が適用可能な場合に、当該Case Arrayによる格付与をembd.Vによるそれよりも優先的に適用することを要求する仮説(23b)が(30a, b, c)の相違を説明すると考えられる。(30a)において、CVのCase Array(___Dat)は、embd.Vのsister要素(目的語)にDatを付与する。この格付与は、Vのsister位置に生成される要素に対するDat付与を排除する規制(8f)により排除される。結果として、(30a)は非文と予測されることになる。それが下位範疇化するPPを伴わない場合のembd.Vの用例も同様に、(23b)によって説明される。例えば、CVは優先的適用されるべき(8a)のCase Arrayをもつ(31c)では、当該Case Arrayによる格付与が発動していない(つまり、非文と予測される)。

ここで、(31a)の用例が問題となる。イタリア語用例(30a)と異なり、当該用例は文法的と判断される。この問題は、対応するイタリア語の場合と異なり、connaîtreタイプとmatrix Vから構成されるCVが、(8a)に加えてPrimary Case Array(___Dat)をもつと想定することにより打開される(仮説(32))。つまり、(31a)において、Case Array(___Acc(Dat))がNP(cela)

(32) Hypothesis:

CV consisting of the matrix V(fai-) and a member of CONNAÎTRE has the primary Case Array(___Dat) in addition to the primary Case Array(___Acc(Dat)).

にAccを付与する。換言すれば、CVのCase Arrayが優先的に適用されていると言える(当該用例は文法的と予測される)。

4. 対応するフランス語構文との比較

本稿では、(1) - (5)のイタリア語用例を説明すると考えられる仮説群が設定された。一般的に、(8a)のCase Arrayをもつmatrix V(fa-)と不定法形態から構成される複合動詞(CV)はembd.Vの外項と内項要素に格を付与する(conoscereタイプの不定法から構成されるCVのCase Arrayは(8a)のそれではなく、(___Dat)のPrimary Case Arrayである)。このCase Array(8a)による格付与に対して、CVと主語要素の間に介在する要素がもつ素性[±Human]に関する規制(26)が提案された。 α 方言において、図式(26a-b)の規制は、clitic主語に対して適用されない(標準イタリア語(SI)では、(26b)の規制がclitic主語とNP主語の双方に適用される)。一般的に、clitic移動(Cliticization)では、同時に X^0 (XP) Bindingの規制に従うことが示された。

最後に、対応するフランス語用例において、上で設定された格付与規制(26)に類似する規制が適用されるかどうか検討する(一部は既に、第3節で検討済み)。²⁰⁾

- (33) a. ???j' ai fait écrire une lettre à Marie aux enfants (Pijnenburg and Hulk 1989:14b)
 'I made the children write a letter to Marie'
 b. Odile lui fait écrire une lettre à Marie (ibid.:88)
 α * 'Odile makes Marie write a letter to him(lui)'

β 'Odile makes him (lui) write a letter to Marie'

- (34) a. *j'ai fait inviter ta sœur à Paul (Pijnenburg and Hulk 1989:73a)
 'I made Paul invite your sister'
 b. je lui ai fait inviter ta sœur (ibid.:73b) 'I made him(lui) invite your sister'
 c. *je l'ai fait inviter à Paul (ibid.:108) 'I made Paul invite him (le)'
 d. [je vous ai fait embrasser à Paul] 'I made Paul kiss you(vous)'
 e. je le lui ai fait inviter (ibid.:108) 'I made him(lui) invite him(le)'
- (35) a. *j'ai laissé/fait embrasser Marie à Jean (Bordelois 1978:63)
 'I let/made Jean kiss Marie'
 b. [je lui laisse/fais embrasser Marie] 'I let/made him(lui) kiss Marie'
 c. [je l'ai laissé/fait embrasser à Jean] 'I let/made Jean kiss her(la)'
 d. [je vous ai laissé/fait embrasser à Jean] 'I let/made Jean kiss you(vous)'
 e. *je le lui laisse/fais embrasser (ibid.:55) 'I let/make him(lui) kiss him(le)'
 f. je le lui ai laissé/fait lire (ibid.:46) 'I let/made him(lui) read it(le)'
- (36) a. Jean fait porter une lettre à Marie à Paul (Burzio 1986:p.243)
 α 'Jean makes Paul take a letter to Marie'
 β * 'Jean makes Marie take a letter to Paul'
 b. Jean lui fait porter une lettre à Marie (ibid.)
 α 'Jean makes him(lui) take a letter to Marie'
 β * 'Jean makes Marie take a letter to him(lui)'
- (37) a. Jean fait embrasser Pierre à Marie (Wehrli 1983:2a)
 'Jean makes Marie kiss Pierre'
 b. [Jean lui fait embrasser Pierre] 'Jean makes her(lui) kiss Pierre'
 c. Jean le fait embrasser à Marie (ibid.:3a) 'Jean makes Marie kiss him(le)'
 d. Jean nous fait embrasser à Marie (ibid.:3b) 'Jean makes Marie kiss us(nous)'
 e. Jean le lui fait embrasser (ibid.:2c) 'Jean makes her(lui) kiss him(le)'

(33) - (34) は、イタリア語の α 方言と同じ挙動を示す。図式 (26a-b) において、主語 NP に対する Dat 付与が排除される (clitic 主語に対する Dat 付与は許容される)。(33a) において、主語 NP (enfants) は Dat を付与されない。CV は、clitic 主語 (lui) に Dat を付与可能である。 α の解釈での (33b) は、主語 NP (Marie) に対する格付与の規制に抵触する。 β の解釈としての (33b) は格付与と X^0 Binding の規制を満たす。(34a-c, e) も同様の論法により説明される (34e) において、主語要素が clitic (lui) である点に留意されたい)。同様に、NCM clitic (vous) が生起する (34d) も非文と予測される (cf. (13))。(35) は、標準イタリア語に類似すると思われる。当該方言では、主語要素が clitic の場合にも、格付与規制 (26b) が適用される。よって、(35a-e) はすべて非文と予測される。(36f) の clitic (le) は [-Human] である。つまり、当該用例は、格付与規則と X^0 Binding の要請を同時に満たす (文法的と予測される)。

(36) - (37) は問題を惹起するように思われる。(36) - (37) は、上の (33) - (35) とは異なる方言グループに属すと考えられる (後述する (38), あるいは (39) の方言に属すであろう)。当該方言において、格付与規制 (26a-b) が発動しないと前提してみよう。その場合、Case Array (8a) は、embd.V の主語に対して Dat を付与する。結果として、(36) - (37) は説明可能となる。この場合、 β の解釈としての (36a) は生成不能として非文と予測される。 β の解釈としての (36b) と (37d) は、 X^0 Binding によって排除される。しかし、この前提は (38) - (39) における主語 NP (Marie) に対する Dat 付与を説明できない。つまり、当該方言には、(26) の規制を回

避する何らかのプロセスが存在すると考えられる。βの解釈での(38a) (=39a)の非文性から判断して、当該方言のCVが(8a)に加えてCase Array (___Dat)をもつと想定することはできないであろう。

(8a)のCase Arrayをもつフランス語のCVは、matrix Vが不定法形態が生起するembd.Tを統率することにより生成される。よって、embd.SPEC(T)に移動した要素に格を付与することはない(cf.構造(6b))。ここで、この格付与の可能性に加えて、不定法形態がmatrix VのVGSへ移動した段階で格付与を発動する方言の存在を想定する(このタイプの複合動詞をCV'と呼ぶ)。このCV'は、Case Array (___Dat)をもつと考えられる(CV'は、embd.SPEC(T)へ移動した主語要素にDatを付与可能である)。更に、embd.SPEC(T)がT'の左方位置、あるいは右方位置に生成されると考える(Parametrization)。(38) - (39)の方言では、embd.Vの主語要素がT'の右方に生成されたSPEC(T)へ移動する。²¹⁾結果として、当該用例におけるembd.Vの主語要素には、(26)の規制に違反することなしに、Datが付与可能となる。

(38) (Wehrli 1983:15,16)

- a. Jean fait téléphoner à Paul à Marie (Wehrli 1983:15)
 α 'Jean makes Marie call to Paul' β* 'Jean makes Paul call to Marie'
 b. *Jean fait téléphoner Marie call to Paul
 'Jean makes Marie call to Paul'
 c. *Jean lui fait téléphoner à Marie
 'Jean makes Marie call to him(lui)'

(39) (Wehrli 1983:15,16)

- a. Jean fait téléphoner à Paul à Marie (Wehrli 1983:15)
 α 'Jean makes Marie call to Paul' β* 'Jean makes Paul call to Marie'
 b. Jean fait téléphoner Marie call to Paul (ibid.:16)
 'Jean makes Marie call to Paul'
 c. *Jean lui fait téléphoner à Marie (ibid.:16)
 'Jean makes Marie call to him(lui)'

同一の方言に属すと考えられる以下の(40) - (42)は、(39)の方言の用例であろう((40a)、(41d)と(42d)の文法性に留意されたい)。詳細な検討は割愛するが、当該用例はすべて、embd.Vがconnaîtreタイプから構成されるCV(CV')のCase Array (___Dat)によってDatを付与される主語NPがNCM(NSD) cliticに対する大主語を構成しないと考えることにより説明されるであろう(connaîtreタイプ以外の動詞から構成されるCV(CV'))から格を付与される主語要素は、当該cliticの大主語となる)。²²⁾

- (40) a. Marcel a fait épouser sa fille au médecin (Postal 1989:p.1,2a)
 'Marcel made the doctor marry his daughter'
 b. [Marcel a fait connaître sa fille au médecin]
 'Marcel had the doctor know his daughter'
 (41) a. *Marcel vous a fait épouser au médecin (Postal 1989:p.2,7a)
 'Marcel had the doctor marry you(vous)'
 b. Marcel vous a fait épouser par le médecin (ibid.:p.3,8a)
 'Marcel had the doctor marry you(vous)'
 c. *le directeur_i se_i fera choisir à Marie (ibid.:préface,A-B)
 'the director_i will make Marie choose himself_i'

- d. la psychiatrie a fait se_i choisir Marcel_i (ibid.:p.9,17a)
 'psychiatry made Marcel_i choose himself_i'
- e. le directeur le/la/les fera choisir à Marie (ibid.:préface,A-a)
 'the director will make/have Marie choose him/her/them'
- (42) a. on vous fera connaître à Louise (ibid.:p.4,10a)
 b. [on vous fera connaître par Louise]
 'one will have Louise know you(vous)'
- c. le directeur_i se_i fera connaître à Marie (ibid.:préface,B-b)
 'the director_i will have Marie know himself_i'
- d. la psychiatrie a fait se_i connaître Marcel_i (ibid.:p.9,18a)
 'psychiatry made Marcel_i know himself_i'
- e. le directeur le/la/les fera connaître à Marie (ibid.:préface,B-a)
 'the director will make/have Marie know him/her/them'

(41c) と (42c) の相違を検討する。(41c)の主語 NP (Marie) は, NCM (NSD) clitic の大主語を構成する ((41) の embd.V は, connaître タイプでない)。よって, 再帰 NCM clitic (se) は, その X⁰-GC (XP-GC) である embd.TP 内部においてその先行詞に束縛される必要がある。明らかに, その束縛要件は満たされない (同時に, この派生は XP Binding A にも抵触する (cf. (20)))。

(42c)の主語 NP (Marie) は, NCM (NSD) clitic の大主語を構成しない。matrix AgrP が NCM clitic (se) の X⁰-GC (XP-GC) となる。結果として, (42c) は X⁰ Binding と XP Binding の双方を満たす (当該用例は, 適切に文法的と予測される)。

以上で, 本稿で対象としたフランス語方言においても, イタリア語に対して想定された格付与規制 (26) が適用されることが示された。また, いくつかのフランス語方言に, この格付与規制を回避するプロセスが存在する可能性が示された。更なる調査の上, 本稿で設定された仮説群の修正が必要であることは言うまでもない。

註

- *) 本稿は, 日本ロマンス語学会第32回大会 (鹿児島経済大学, 1994年5月21日) における研究発表の一部である。その席上, 近松洋男氏より有益なアドバイスをいただいた。スペイン語用例の検討は, 石岡 (forthcoming-c) でなされる予定。
- 1) clitic 要素には二重下線を付す。embd.V の主語要素を導入する要素 (a, da) には下線 (波線) を付す。
- 2) embd.V の主語要素は, 擬人化の場合を含め, 常に [+Human] の素性をもつと考える。
- 3) (4b) のような主語要素が Adjunct (Da+NP) で実現される場合の非文性については後述する。(1) から (4) の用例と異なり, (5a) は標準イタリア語以外の方言の用例と考えられる (当該方言を, 仮に α 方言と呼ぶ)。
- 4) (6b) における動詞統率 Slot (Verbal Government Slot (VGS)) の存在に関しては, 石岡 (forthcoming-a) を参照されたい。MSS に関しては, Guasti (1991) と Roberts (1991) を参照されたい。また, Fare 使役構文における Floating Quantifier の挙動については, Guasti (1991) と石岡 (forthcoming-b) を参照されたい。不定法形態のみを内包する Agr の複合体が matrix V の MSS 位置へ移動可能と考えられる。よって, clitic を随伴する不定法形態を内包する Agr の複合体は, 当該 MSS 位置へ移動できない (この場合, CV の形成が排除される)。
- 5) イタリア語の知覚構文も (6a) に同じ構造をもつ。更に, 知覚構文は, 不定法形態が embd. Agr 位置でその主要部移動を停止する構造をもつ (この場合には CV が形成されることはなく, 後述する CV の Case Array と異なり, matrix V と embd.V がそれぞれ単独で格を付与する)。
- 6) embd.V の主語が基底生成される位置に Adjunct 主語を導入する前置詞 (da) の sister 要

- 素 (Carlo) と同一指標の関係にある PRO が生起すると考える。当該 Adjunct の生成位置に関しては、稿を改めて検討する。
- 7) フランス語とイタリア語の不定法 AgrP (CP), Restructuring Construction における Agr については、石岡 (forthcoming-a, -b) で検討される。また、本稿の定義体系では、PRO が大主語となる可能性はない。matrix AgrP が embd.V の主語 clitic の X⁰-GC となる点に留意されたい。
 - 8) (10f-g) は、CV が形成されない場合の知覚構文の用例である。この場合、matrix V が embd.SPEC (Agr) へ移動した主語 NP (il ragazzo) に格 (Acc) を付与する (matrix V は、(8a) の Case Array をもつ)。つまり、embd.Agr, あるいは embd.SPEC (Agr) に移動した主語 NP (il ragazzo) が大主語となる (embd.AgrP が CM clitic (la) の X⁰-GC となる)。結果として、clitic (la) は embd.Agr 位置へ付加移動する。
 - 9) X⁰ Binding による (11a-b) と (12d) の説明では、CV が embd.V の主語要素に Dat を付与可能であると前提されている。後述する仮説によれば、当該用例における embd.V の主語には格が付与されない (つまり、当該用例は Case Filter により排除される)。(12a) と (13) は、第2節で検討される。
 - 10) 要素格付与と位置格付与に関しては、石岡 (1992) を参照されたい。(13b) は基本的に文法的と予測される。(13e) の主語 clitic (te) には Acc, あるいは Dat が付与される。イタリア語の matrix V (fa-) はその MSS 位置に不定法形態のみ内包する embd.Agr を選択する。よって、イタリア語では、NCM clitic が embd.V へ付加移動する Strategy は発動しない。
 - 11) 同様のプロセスにより、(4a) と (5b) の文法性が説明される。
 - 12) (23b, d) は、特に、対応するスペイン語の受動 Hacer 構文を説明するために必要となる (スペイン語に関しては、石岡 (forthcoming-c) を参照されたい)。
 - 13) フランス語用例に関しては、第4節においても言及される。
 - 14) (2) - (5) の用例は、すべて X⁰ Binding の要請を満たす。
 - 15) aiutare と uccidere は conoscere タイプに属さない。
 - 16) これにより、(12a) における格付与が説明される。embd.V が目的語 (qualcuno) に Acc を付与し、Case Array (___ Dat) が主語 (qualcuno) に Dat を付与する。
 - 17) presentare は conoscere タイプに属さない。(29e) の非文性は、本稿の (12b) の非文性に呼応するものである。
 - 18) Burzio (1986:p.252) : In general, the by-phrase seems possible only if some object is present, as shown by the contrast between (52) (=30e-f) and (53) (=30d). この前提の下では、(31e) の PP (chez vous) は V (venir) に下位範疇化されないことになる。
 - 19) Postal (1989) は、connaître タイプとして reconnaître (to recognize), voir (to see) を挙げる。
 - 20) [] は、その文法性判断が未確認の用例を指す。
 - 21) (36) 以降の用例が惹起する問題に関する詳細は、石岡 (forthcoming-d) で検討される。(38b) の非文性に留意されたい。これは、(39) の方言と異なり、(38) の方言が CV' による格付与のみ許容すると前提することにより説明可能。また、CV' が T' の左方位置にある SPEC (T) に移動した主語要素、あるいは T' 右方 (左方) の SPEC (T) に移動した主語要素に格を付与可能であることは、それぞれ (i), (ii) の用例により検証される。
(i) ?je ferai porter à Jean ce message à Pierre (Ruwet 1972:p.255,15b)
'I will make Jean send the message to Pierre'
(ii) ça a fait téléphoner à Pierre à Marie (Postal 1981:19)
'that made Marie call to Pierre' 'that made Pierre call to Marie'
 - 22) イタリア語と同様に、(33) - (35) の方言においても、connaître タイプから構成される CV は Case Array (___ Dat) をもつと考えられる。よって、(33) - (35) の方言としての (42) に対して、(39) の方言のそれと同じ予測が期待される。

参考文献

- Aoun, J. (1985). A Grammar of Anaphora. MIT Press, Cambridge (Mass.)
 Baker, M. C. (1988). Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing.
 University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
 Belletti, A. (1990). Generalized Verb Movement. Rosenberg & Selier, Torino.

- Bordelais, I. (1978). "Animacy or Subjecthood: Clitic Movement and Romance Causatives." Suñer, Margarita (ed.) *Contemporary Studies in Romance Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Burzio, L. (1986). *Italian Syntax: a Government-Binding Approach*. Reidel, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Goodall, G. (1987). "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Gerdeño (eds.) *Studies in Romance Languages*. Foris, Dordrecht.
- Guasti, M. T. (1991). "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." *The Linguistic Review* 8, 209-232.
- Kayne, R. (1975). *French Syntax: the Transformational Cycle*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Kayne, R. (1989). "Null Subjects and Clitic Climbing." Jaeggli, O. and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. Kluwer, Dordrecht.
- Kayne, R. (1991). "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO." *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The Position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- Marcantonio, A. (1979). "The Distribution of A and Da in Italian Causative Constructions." *Journal of Italian Linguistics* 6, 1-33.
- Ouhalla, J. (1989). "Clitic Movement and the ECP: Evidence from Berber and Romance Languages." *Lingua* 79, 165-215.
- Ouhalla, J. (1991). *Functional Categories and Parametric Variation*. Routledge, London and New York.
- Peijnenburg, H. and Aafke, Hulk (1989). "Datives in French Causatives." *Probus* 1.3, 259-282.
- Postal, Paul M. (1981). "A Failed Analysis of the French Cohesive Infinitive Construction." *Linguistic Analysis* 8/3, 281-313.
- Postal, Paul M. (1989). *Masked Inversion in French*. The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Radford, A. (1979). "Clitics under Causatives in Romance." *Journal of Italian Linguistics* 4, 137-181.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Roberts, I. (1991). "Excorporation and Minimality." *Linguistic Inquiry* 22.1, 209-218.
- Rouveret, A. and J.-R. Vergnaud (1980). "Specifying Reference to the Subject: French Causative and Conditions on Representations." *Linguistic Inquiry* 11, 97-202.
- Ruwet, N. (1972). *Théorie Syntaxique et Syntaxe du Français*. Les Éditions du Seuil, Paris.
- Skytte, G. and G. Salvi (1991). "Frase subordinate all'infinito." Renzi, L. and G. Salvi (eds.) *Grande Grammatica Italiana di Consultazione*. il Mulino, Bologna.
- Strong, D. R. (1983). *Aspects of the Diachrony of the Italian Causative Construction*. Ph.D dissertation, The University of Michigan.
- Wehrli, E. (1983). "Remarks on Cliticization in French Causatives." *MIT Working Papers in Linguistics* 5, 180-194.
- Zubizarreta, M. (1986). "Le statut morpho-syntaxique des verbes causatifs dans les langues romanes." M. Ronat & D. Couquaux (eds.) *La Grammaire Modulaire*, Les Éditions de Minuit, Paris.
- 石岡精三 (1992). 「フランス語 Faire 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』6号, 71-100.
- 石岡精三 (1993). 「Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について」『ロマンス語研究』26号, 115-133.
- 石岡精三 (1994a). "Some Facets of Cliticization in the Spanish Causative Construction." *NIDABA (Linguistic Society of West Japan)* 23, 1-12.
- 石岡精三 (1994b). 「フランス語とイタリア語における受動使役構文について」『ロマンス語研究』27号, 53-65.
- 石岡精三 (forthcoming-a). 「フランス語における R-Tous と L-Tous について—イタリア語の並行事象との比較において—」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』8号.
- 石岡精三 (forthcoming-b). 「イタリア語における R-Tutti と L-Tutti について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』8号.
- 石岡精三 (forthcoming-c). 「受動 HACER 使役構文と Cliticization における移動経路理論について」長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』8号.
- 石岡精三 (forthcoming-d). 「Faire 使役構文における格付与と Cliticization について(方言分布を中心にして)」.